天使女子短期大学専攻科修了生の動向と教育評価

―保健婦助産婦合同教育課程に対する評価―

Educational Assessment and Assessing Trends of the Graduates In Special Course of PHN and Midwifery Attached to Department of Nursing at Tenshi Women's College

吉　田　礼維子
Reiko YOSHIDA
渡　辺　由加利
Yukari WATANABE
正　岡　経　子
Keiko MASAOKA
白　井　英　子
Eiko SHIRAI

This study was conducted to observe the trends among graduates who specialized in PHN and Midwifery Program in the Department of Nursing and to assess the integrated education of public health nurses and midwives. The followings were obtained from a survey of 367 students who graduated.

1) The occupation rate among the graduates was 79% in March 2001 and 76% of them were full-time employees.
2) The sorts of professions could be categorized as 132 public health nurses (36%), 77 midwives (21%), 29 hospital nurses (10.6%), and 28 teachers (7.6%). Most of them engaged in municipal health centers or general hospitals.
3) Immediately after graduation, 216 subjects were recruited as midwives (58.9%) and 108 as public health nurses (29.4%). The 56% subjects were resigned within the first five years from the fresh appointment due to their marriage, childbirth, childcare, and an interest in some other fields or institutions.
4) Total number of 101 subjects (21.5%) used both of their qualifications as public nurses and midwifes.
5) The contents used in the program helped 94.6% and 73.6% in their professional and daily lives, respectively. The techniques practiced in the lessons improved to get the knowledge specialized and contributed to gain self-worth with the deep human understandings. These were consisted in the core of the Integrated Program for PHN and Midwifery.
6) Respondent's hopes for their Alma Mater be with spiritual values for health science based on Christian point of views such as human affection and compassion to enhance the basic nursing education and to progress as a long-term academic institution.

Key words : Special Course of PHN and Midwifery attached to the Department of Nursing.
integrated programs for public health nurses and midwives.
trends among graduates.
educational assessment.
hopes for their Alma Mater.

天使大学 看護栄養学部 看護学科
天使女子短期大学 専攻科 衛生看護学専攻（兼務）

（2001年12月10日受稿、2002年１月29日審査終了受理）

Ⅰ．はじめに

天使女子短期大学専攻科衛生看護学専攻（以下専攻科と略す）は、昭和28年に開設された天使助産婦学校を前身に、昭和40年に保健婦助産婦合同課程として開設された。以来、平成12年３月までに797名の修了生を社会に送り出し、それぞれに取得した資格を活かして様々な分野で活躍している。

本学の教育理念や保健婦助産婦合同課程の教育が、修了後の専門職業人としての生き方や日常生活を送る中でどのように活用され、反映されているのか、専攻科での学びをどのように評価しているのかを把握し、修了生の動向と合わせて専攻科教育の評価を行いたい。

平成12年天使女子短期大学の大学への移行に伴い、専攻科は平成14年度に閉校する予定である。一つの区切りとして、これまでの専攻科教育の評価を行い、今後の４年生大学での保健婦看護婦の統合教育、さらには助産婦教育の方向性を考える上での参考としたい。

Ⅱ．研究目的

1. 専攻科修了生の動向を明らかにする。
2. 教育理念や保健婦助産婦合同課程の教育が修了後の専門職業人としての生き方や日常生活、社会生活でどのように生かされたかを明らかにする。
3. 修了生が専攻科で学んだこと、不足していたことを明らかにし、保健婦助産婦合同教育課程の評価を行う。
4. 修了生が母校に期待することを明らかにする。

Ⅲ．研究方法

1. 調査対象

天使女子短期大学専攻科の１回生（昭和41年３月修了）から35回生（平成12年３月修了）の797名のうち、所在が明らかな636名を対象とした。

2. 調査期間

平成13年３月上旬に発送し、３月下旬に回収した。

3. 調査・分析方法

調査方法は、郵送法による自記式アンケート方式調査を行った。調査内容は、平成９年に行われ

表１　年度別修了者数と回収数

期(回)	修了年度	修了者数	回収数	期(回)	修了年度	修了者数	回収数
1	昭和40	11	5	19	昭和58	22	11
2	41	17	8	20	59	24	11
3	42	18	5	21	60	24	13
4	43	24	9	22	61	24	16
5	44	21	8	23	62	24	8
6	45	24	9	24	63	24	14
7	46	25	11	25	平成元	24	19
8	47	26	13	26	2	24	13
9	48	22	12	27	3	24	10
10	49	26	13	28	4	21	11
11	50	24	9	29	5	25	15
12	51	23	9	30	6	24	11
13	52	24	12	31	7	23	8
14	53	23	11	32	8	24	7
15	54	21	11	33	9	23	8
16	55	23	5	34	10	23	9
17	56	23	10	35	11	22	8
18	57	23	14	不　明			1
				合　計		797	367

表２　現在の勤務先

勤　務　先	合　計		保健婦	助産婦	看護婦	養護教諭	教　員	その他
	人数	%	人数	人数	人数	人数	人数	人数
大学病院	10	3.4	2	3	5	0	0	0
総合病院など大きな病院	65	22.3	10	44	10	0	0	1
その他の病院	13	4.5	1	6	5	0	0	1
医院・診療所	19	6.5	1	9	8	0	0	1
訪問看護ステーション	8	2.7	8	0	0	0	0	0
保健所	18	6.2	17	0	1	0	0	0
市町村（保健センター）	75	25.8	63	11	1	0	0	0
事業所	10	3.4	9	0	1	0	0	0
健診センター・労働衛生機関	7	2.4	7	0	0	0	0	0
学校の健康管理部門	3	1	3	0	0	0	0	0
養護教諭	3	1	0	0	0	3	0	0
老人保健施設・老人ホーム	4	1.4	0	0	4	0	0	0
福祉施設	4	1.4	1	0	2	0	0	1
道庁・県庁	2	0.7	2	0	0	0	0	0
看護大学	9	3.1	0	0	0	0	9	0
看護短大	5	1.7	0	0	0	0	5	0
看護学校	10	3.4	0	0	0	0	10	0
福祉系学校	2	0.7	0	0	0	0	2	0
助産所	1	0.3	0	1	0	0	0	0
母子保健指導員	4	1.4	1	3	0	0	0	0
その他	18	6.2	7	0	2	0	2	7
合　　計	290	100	132	77	39	3	28	11

た短大卒業生の動向調査[1]を参考に検討した。調査項目は、対象者の背景、現在の就業状況、修了後の就業経過、修了後の教育や社会活動の状況、教育理念や専門教育に対する評価、母校への要望を大項目として設定した。平成13年３月現在で回答を求め、選択肢法と自由記述法を用い、無記名とした。調査表の集計、分析はエクセル統計を用い、単純集計、クロス集計を行った。自由記述形式の回答については、研究者間で内容を分析して、分類した。

Ⅳ．結　　果

年度別の修了生数と回収数は、表１のとおりである。回答数は367名で、回答率は57.7％であった。現在の居住地では、札幌市内居住者131名（35.7％）、札幌市外の道内居住者138名（37.6％）、道外97名（26.4％）、不明１名であった。

1．修了生の動向

1）現在の就業状況

就業状況は、図１のとおりで、常勤者221名（60.2％）、非常勤31名（8.4％）、パート27名（7.4％）、自営業等12名（3.3％）、無職76名（20.7％）で、就業率は79.0％であった。就業職種と勤務先は表２のとおりで、職種別では、保健婦での就業が就業者の45.5％（132名）で最も多く、次いで助産婦26.6％（77名）、看護婦13.4％（39名）であった。勤務先では、市町村・保健センター、総合病院が多かった。職種別で見ると、保健婦は、市町村・保健センター、保健所、病院、事業所、訪問看護ステーション等に就業している。助産婦

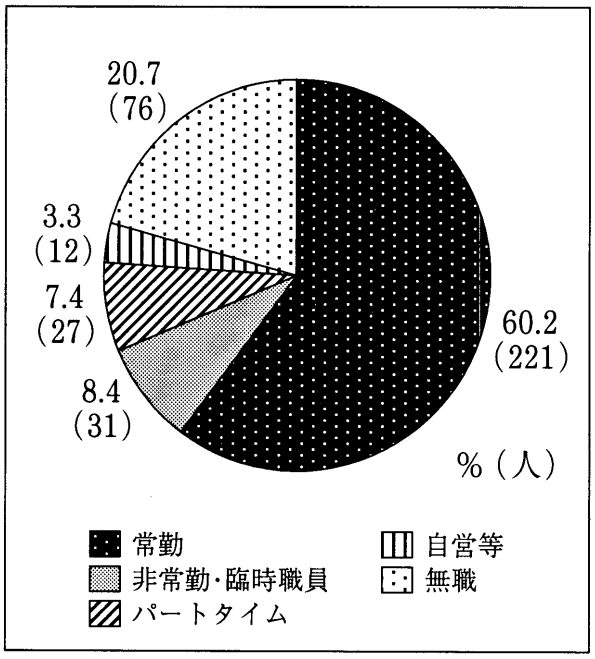

図１　現在の就業状況

表３　現在の就業職種と職位

保健婦		助産婦		看護婦		看護教員	
職位	人数	職位	人数	職位	人数	職位	人数
課長	1	婦長	2	婦長	5	教授	3
係長	17	主任	5	主任	3	助教授	6
主査	9	職員	59	職員	24	講師	3
職員	78	その他	11	その他	7	助手	3
その他	25					実習調整者	2
						専任教員	6
						非常勤講師	4
合　計	132	合　計	77	合　計	39	合　計	28

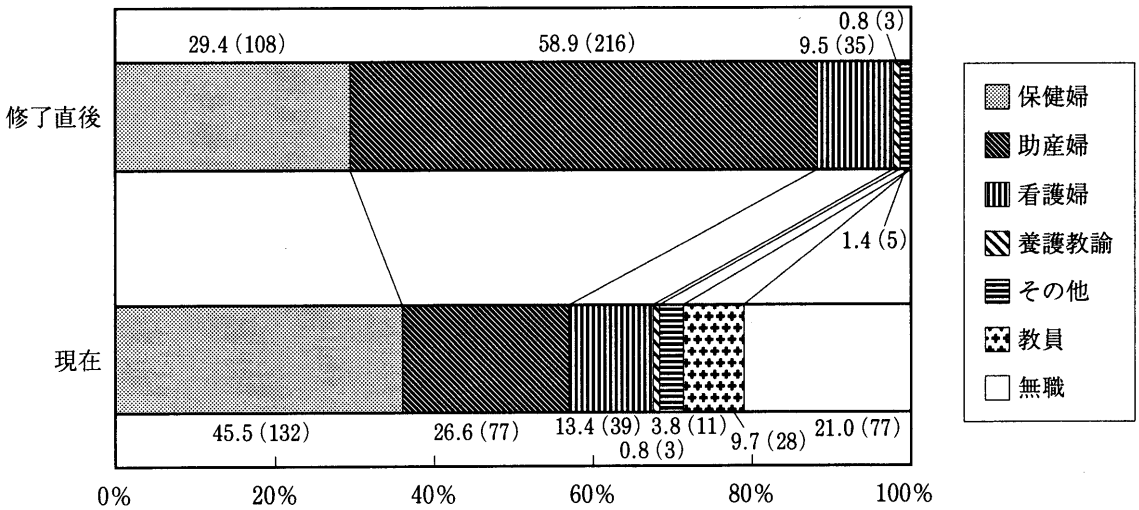

図２　修了直後と現在の就業職種

は、総合病院、保健センター、医院・診療所などに就業している。看護婦は、総合病院、医院・診療所等である。その他、教員として、看護学校、短大、大学で就業していた。職種と職位は、表３のとおりで、スタッフとして就業している人が多かったが、保健婦で課長・係長職にある者は18名（13.6%）、助産婦で婦長・主任職にある者は７名（９%）、教員では教授・助教授が９名（32.1%）であった。

2）修了後の進路

修了直後と現在の就業職種は図２に示すとおりで、専攻科修了後すぐに就いた職業では、助産婦が216名（58.9%）で最も多く、次いで保健婦108名（29.4%）、看護婦35名（9.5%）であった。初めての勤務先での勤務年数は図３に示すとおりで、１年以上３年未満が最も多く116名（31.6%）、次いで３年以上５年未満が90名（24.5%）、５年以上８年未満48名（13.1%）であった。退職理由は表４に示すとおりで、結婚が72名と最も多く、次いで他施設・他分野への関心が57名、出産育児のためが33名、キャリアアップのため31名、配偶者の転勤が26名であった。

現在、無職者は76名であり、そのうち看護職で就業を希望している人は65名（85.5%）であった。無職の理由は表５に示すとおりで、出産育児のためが42名と最も多く、家事との両立の困難15名、条件にあう就職先がない11名、配偶者の転勤10名などであった。

修了後から現在までの資格の活用状況は表６のとおりで、保健婦のみが83名、助産婦のみが87名、保健婦・助産婦の両方を活用している人は101名であった。職種別の平均勤務年数は表７のとおりで、保健婦9.9年、助産婦6.7年で、最も長いのは教員12.1年、次いで養護教諭10.1年であった。

3）修了後の教育と社会活動

専攻科修了後に受けた教育は、表８に示すとおりで、大学の通信教育が26名、放送大学17名、教員養成コース15名、看護学修士10名、看護以外の

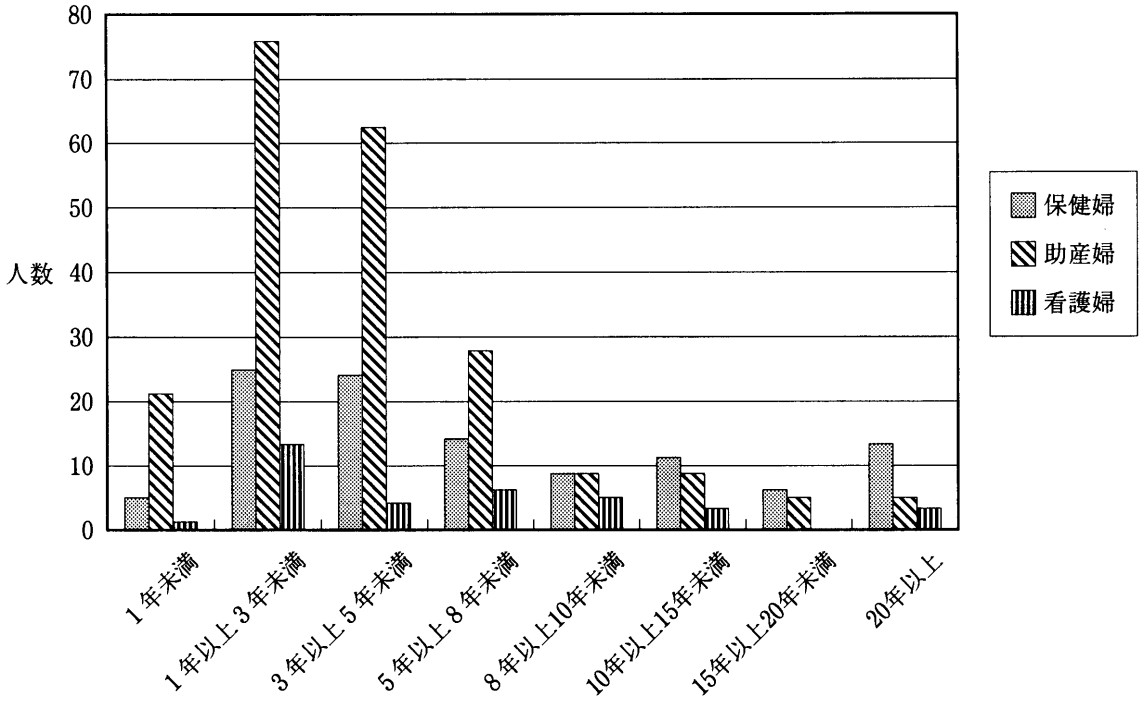

図3　最初の勤務先の就業年数

表4　退職理由　（複数回答）

	保健婦	助産婦	看護婦	養護教諭	その他	合　計
結婚	25	42	5	0	0	72
進学	3	4	3	0	0	10
奨学金返済	1	15	4	0	0	20
キャリアアップ	7	19	3	1	1	31
出産育児	5	26	2	0	0	33
配偶者の転勤	3	19	2	1	1	26
家族の看護	3	4	0	0	0	7
家事との両立困難	0	3	2	0	0	5
健康上の理由	4	9	1	0	0	14
仕事内容の不満	7	9	2	0	0	18
賃金の不満	0	2	1	0	0	3
労働時間・体制等の不満	1	6	1	0	0	8
自分の適性・能力の不安	3	3	1	0	0	7
他施設・他分野への関心	11	41	5	0	0	57
その他	8	11	5	1	0	25
退職者数	62	178	26	2	3	271

表5　無職の理由　（複数回答）

無職の理由	人　数
結婚のため	2
出産育児のため	42
家族の看護のため	1
家事との両立困難	15
配偶者の転勤	10
就学中・就学準備のため	6
健康上の理由	3
自分の適性・能力の不安	6
休息したい	0
充電したい	2
条件にあう就職先がない	11
就業する気持ちがない	5
その他	12

表6　資格の活用状況

活用した資格	人　数	%
保健婦のみ	83	22.6%
助産婦のみ	87	23.7%
保健婦×助産婦	60	16.3%
保健婦×助産婦×その他	41	11.2%
保健婦×その他	29	7.9%
助産婦×その他	43	11.7%
看護婦のみ	12	3.3%
看護婦×その他	5	1.4%
養護教諭のみ	2	0.5%
その他	5	1.4%
合　　計	367	100.0%

表７　職種別の平均就業年数

職　種	延人数	平均年数
保健婦	213	9.9
助産婦	231	6.7
看護婦	104	5.6
養護教諭	11	10.1
衛生管理者	3	7.4
教員	28	12.1
その他	10	5.7

表８　修了後に受けた教育（複数回答）

教　育　内　容	人　数
看護系大学編入	7
看護系大学以外の編入	8
大学通信教育	26
大学夜間	8
放送大学	17
看護系大学院修士課程	10
看護系以外の大学院修士課程	10
大学院博士課程	3
教員養成コース	15
国立公衆衛生院	6
その他	21

表９　社会活動の経験（複数回答）

社　会　活　動	人　数
看護専門職団体役員・委員	62
公的機関の役員・委員	16
公的団体の役員・委員	3
私的団体の役員・委員	17
青年海外協力隊	6
ボランティア	21
その他	10

表10　今後受けたい教育・資格（複数回答）

今後受けたい教育・資格	人　数
大学の入学・編入学	81
大学の聴講	75
大学院	22
専門看護師	4
認定看護師	1
認定看護管理者	0
海外留学または研修	10
国内での長期研修	12
その他	28

修士10名であった。社会活動は、表９に示すとおりで、看護専門職の団体役員・委員が62名と最も多く、次いでボランティアが21名、公的団体の役員・委員が17名、公的機関の役員・委員が16名、青年海外協力隊６名であった。今後、受けてみたいと思っている教育・資格は、表10に示すとおりで、大学の入学・編入学81名、大学の聴講75名、大学院への進学22名であった。

2. 専攻科カリキュラムに対する修了生の評価

1）志望理由と教育の有用性への認識

専攻科志望の理由については、表11に示すとおりで、保健婦・助産婦の2つの資格がとれる174名、保健婦助産婦の両課程を学べる128名で、両方の資格取得、教育課程を理由に選択している人が多く、天使短大で継続して学びたかったからは34名であった。

表11　専攻科選択の理由

選　択　理　由	人　数
保健婦・助産婦の両課程を学べるから	128
保健婦・助産婦の２つの資格をとれるから	174
保健婦の資格が取れるから	7
助産婦の資格が取れるから	9
家族や友人に進められて	3
キリスト教の理念に基づく教育をしているから	8
天使短大で継続して学びたかったから	34
その他	4
合　　計	367

専攻科での学びの活用については図４のとおりで、職業生活に関しては、347名（94.6%）が活かされている、活かされていないは３名（0.8%）であった。日常生活に関しては、271名（73.6%）が活かされている、活かされていないは１名（0.3%）であった。社会的な活動では、172名（46.9%）が活かされている、活かされていないは25名（6.8%）であった。活かされている学びの内容については表12に示すとおりで、職業生活では、専門的知識や技能という回答が301名で最も多かった。日常生活では、自分の価値観を形成できた201名、良い友人を得ることができた140名、人間理解の幅が広がった118名、広い視野で考えられるようになった84名、掃除などの生活技術が身についた46名、専門知識技能が身についた41名であった。社会的な活動では、広い視野で考えられるようになった105名で、次いで人間理解の幅が広がった91名、自分の価値観を形成できた81名、キリスト教的人間観が身についた57名、良い友人を得ることができた54名、困難に向かっていく力

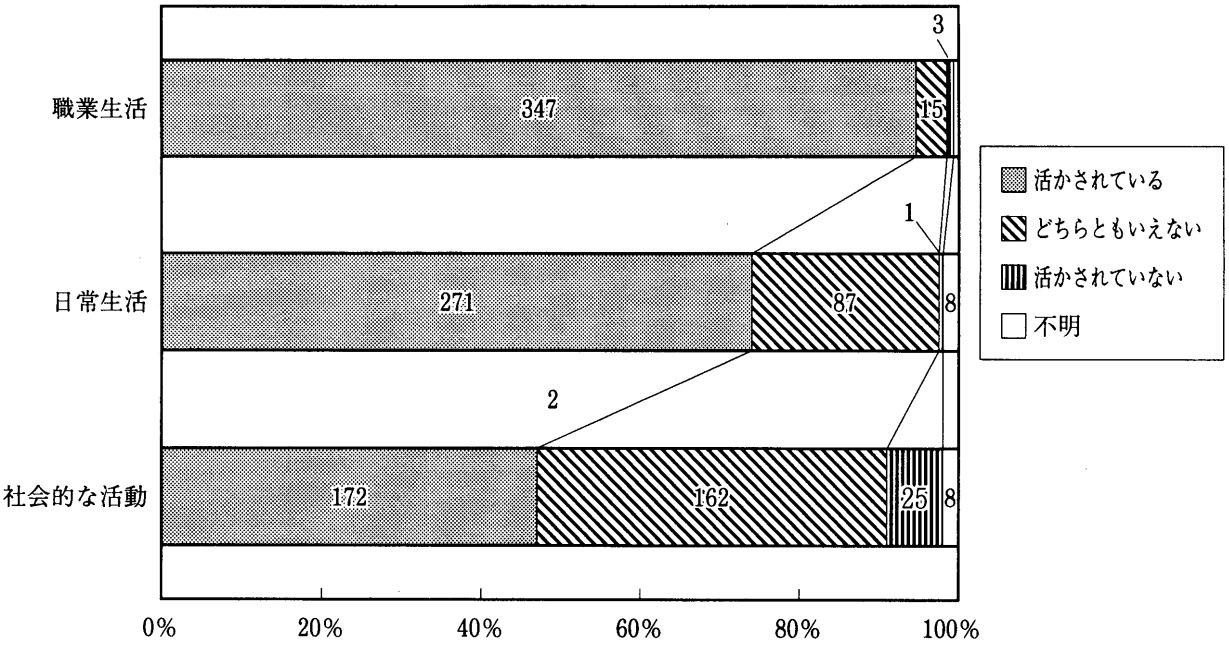

図4　学びの活用

表12　活用されている学びの内容

活かされている学びの内容	職業生活	日常生活	社会生活
専門的知識技能が身についた	301	41	36
広い視野で考えられるようになった	16	84	105
キリスト教的人間観が身についた	4	55	57
人間理解の幅が広がった	11	118	91
自分の価値観を形成できた	7	201	81
よい友人を得ることができた	3	140	54
困難に向かっていく力がついた	3	76	52
リーダーシップが身についた	11	5	31
掃除などの生活技術が身についた	1	46	9
その他	3	3	1

（上位３位までの合計人数）

がついた52名であった。

2）専攻科での学びと不足に関する意見

専攻科の教育内容で特に学べたことでは、表13に示したとおりで、『保健婦助産婦に共通する内容』『看護者としての責務と看護観の形成』『助産婦として知識・技術』『保健婦としての知識・技術』の大きく４つのカテゴリーに分類された。最も多かったのは『保健婦助産婦に共通する内容』の記述138件で、その内容としては「対象理解の広がりと深まり（82件）」「面接・保健指導・援助技術（13件）」「保健婦・助産婦の役割の共通性と相違（38件）」などである。次ぎに『看護者としての責務と看護観の形成』の記述42件で、「自分を見つめることの大切さと人間観・看護観の形成（34件）」「命の大切さの実感（８件）」などであった。各々の専門性の学びでは『助産婦として知識・技術』の記述が42件で、その内容は「助産婦の専門的知識」「助産技術」等である。『保健婦としての知識・技術』としては、「保健婦としての地域を見る視点」「地区診断」などが記述されていた。

専攻科の教育内容で不足していると感じたことについては、表14に示したとおりで、『カリキュラム全般に関する内容』『保健婦の知識・技術』『助産婦の知識・技術』『不足は感じない』の大きく４つのカテゴリーに分類された。最も多かったのは『カリキュラム全般に関する内容』の124件で、特に「カリキュラムの過密による知識・経験の不足（52件）」「実習・健康教育の実践（15件）」があげられ、専門科目では「家族計画・受胎調節（15件）」「研究（９件）」などが記述されていた。

表13　専攻科で特に学習できた内容

学　習　内　容	件数
保健婦助産婦に共通する内容 1. 対象理解の広がりと深まり（82件） ・母子保健の考えの深まり（38件） ・女性のライフサイクル全般の捉え（妊娠・出産・育児を含む） ・誕生から死までのライフサイクルを通しての理解 ・病んでいる人だけではなく、健康な人を含めての対象理解 ・個人から家族・地域への広がり ・予防的視野 ・対象理解のための基礎的知識 2. 面接・保健指導・援助技術（13件） ・継続事例実習を通して母子の保健指導 ・面接技術・相談技術 ・新生児訪問や家庭訪問における援助技術 3. 保健婦・助産婦の役割の共通性と相違（38件） ・保健婦・助産婦・看護婦の役割の多面的な理解 ・職種の共通性や違い ・保健婦と助産婦の連携の意義，今後の方向性 4. その他（5件） ・看護研究 ・思考過程	138件
看護者としての責務と看護観の形成 1. 自己を見つめることの大切さと人間観・看護観の形成（34件） ・看護者として人間として自分を問い直すこと見つめることの大切さ ・キリスト教的人間観を通して自己の価値観の形成 ・講義・実習を通して，専門職業人としての責任と自信 2. 命の大切さの実感（8件） ・母性の保護の重要性と命の尊さ ・生命倫理	42件
助産婦の知識・技術 ・助産婦の専門知識・実践能力（分娩介助を含む） ・妊娠・分娩・産褥の助産過程 ・助産婦としての判断力	42件
保健婦の知識・技術 ・保健婦として地域を見る視点，地域の活動 ・地区診断（えりも町のセミナー） ・プライマリーヘルスケアの理念と公衆衛生	7件

また、「人間理解、視野を広げるための基礎科目(10件)」、少数ではあるが「理念教育（4件)」をあげている人もいた。各々の専門性の不足では『保健婦の知識・技術』に関する内容の記述が79件で、「保健婦に関する教育全般（35件)」「保健婦の実習時間や内容（17件)」専門科目としては「精神衛生・精神保健（12件)」「成人老人保健（6件)」「地区診断（6件)」などがあがっていた。『助産婦の知識・技術』は24件で、「助産婦に関する教育全般（13件)」「助産実習の内容（7件)」「助産所など地域での助産婦活動（4件)」があげられていた。『特に不足は感じない・修了後カバーできる』という回答も16件あった。

3）保健婦助産婦合同課程で学んだことの意味

保健婦・助産婦合同課程で学んだことの意味については、表15に示すとおりで、9カテゴリーに分類された。もっとも多かったのは『視野の広がり』121件で、その内容は「幅広い知識と考える力が備わった（59件)」「看護に対する視野の広がり（47件)」「対象者に対する見方の広がりと深まり（15件)」である、次に多かったのは『学んだ知識はどちらの職業に就いても有効』58件で、「合同過程での学習は共通する部分があり有意義（8件)」「保健婦で働く上で助産婦の知識・技術を活かすことができる（33件)」「助産婦で働く上で保健婦の知識技術を活かすことができる（17件)」

表14　専攻科の教育内容で不足していると感じたこと

内　　容	件数
カリキュラム全般に関する内容 1. カリキュラムの過密による知識・経験の不足（52） ・広く浅く学んだ印象で深まりに欠ける ・じっくり取り組み，振り返る時間的・精神的ゆとり 2. 両課程共通の専門科目 ・保健指導・カウンセリング（6） ・乳幼児の成長発達：発達過程，小児の心理，母子保健の知識（4） ・家族計画：家族計画・避妊の知識内容の偏り，受胎調節実地指導員資格（15） ・研究：研究方法，時間がなく研究を深められなかった（9） ・統計：統計処理，統計的分析能力，パソコン（4） ・調整的役割：コーディネーターの知識・技術，チームワークの学習（5） 3. 実習全般，健康教育の実践（15） ・保健婦・助産婦の実習時間が少ない，実習内容・経験が少ない ・健康教育の実践の経験，母親学級・安産教室の経験 4. 人間理解，視野を広げるための基礎科目（10） 5. 理念教育（4） ・キリスト教的人間観，宗教教育，他校からの入学者に対する理念教育	124件
保健婦の知識・技術 1. 保健婦に関する教育全般（35） ・教育内容の不足，学習内容の範囲が狭い ・地域活動・行政の視点・予防の視点 ・現場ですぐに必要な実践的知識・技術 2. 保健婦専門科目 ・精神衛生・精神保健：精神衛生全般，精神疾患，精神看護（12） ・成人・老人保健：成人・老人保健，特定疾患，結核，伝染病の知識（6） ・産業保健・学校保健：教育内容の不足（3） ・地区診断：地域全体の保健計画立案・支援，住民組織の支援方法（6） 3. 保健婦の実習（17） ・実習時間の不足 ・成人・老人の実習の不足	79件
助産婦の知識・技術 1. 助産婦に関する教育全般（13） ・助産婦教育内容の不足，詰め込みすぎ ・助産婦の実践的知識・技術 2. 助産所など地域での助産婦活動（4） ・助産所の活動，病院以外の助産婦活動 3. 助産婦の実習（7） ・実習の内容・深さ，助産所など病院以外の助産婦活動	24件
不足はない・修了後カバーできる 1）特に不足はない（11） ・不足は感じない ・学習の基礎は専攻科の教育内容で学んでいる 2）不足はカバーできる（5） ・不足は修了後の積み重ねでカバーできる	16件

表15　保健婦・助産婦合同課程で学んだことの意味

項　　目	件数
視野の広がり 1. 幅広い知識と考える力が備わった（59件） ・ものの見方が広がった，多面的になった ・両方の専門的知識を習得でき広い視野で仕事ができる 2. 対象者に対する見方の広がりと深まり（15件） ・幅のある視野で対象を見ることができるようになった ・対象を生活している人として捉える力がついた 3. 看護に対する視野の広がり（47件） ・総合的看護観が身についた ・看護の継続性について理解が深まった	121件
学んだ知識はどちらの職業についても有効 1. 合同課程での学習は共通する部分があったのでとても有意義だった（8件） ・片方の知識・技術はどちらの職業においても十分に役立った 2. 保健婦で働く上で助産婦として学んだ知識・技術を活かす事ができる（33件） ・妊婦や新生児の健康相談，家庭訪問で助産婦として学んだ知識が役立った ・保健婦の活動をしていく上で母子保健に役立った，理解が深まった 3. 助産婦で働く上で保健婦として学んだ知識・技術を活かす事ができる（17件） ・対象である妊産褥婦を地域で生活する視点をもってみることができる ・保健指導に役立っている	58件
職業選択の幅の広がり ・進路を選択する幅が広がった ・看護職の中で自分に一番あった仕事を選択できた	25件
困難に立ち向かう自信 ・大変だったがやる気になれば出来るという自信になった ・困難に向かうことから道が開けることを実感した ・何事にも挑戦し立ち向かっていく力がついた	31件
自分を知る機会／人間形成の場 ・自分自身を形成する上でとても重要なもの ・自分自身をみつめた ・人間の生死を両方考えることができた	20件
合同課題での学びと資格取得による自信 ・2つの資格を取得したことで自信となった ・周産期をとりまく保健指導に自信がもてた ・母子保健を学んだことは仕事上の自信となっている	13件
良き友人・思い出を得た ・友人・先生方に支えられて乗り切ることができた ・苦楽を共にし得た友情は一生のものである	13件
自分自身の出産・育児・介護に役立った ・自分自身の出産・育児に役立った ・自分の出産・育児・介護に知識・技能を活かすことができた	11件
1年間で両方の資格を得た ・両方の資格が1度に取得できたこと ・1年間で両方の資格を得たので早く社会に巣立てた	7件

であった。その他には職業人としての内容として『職業選択の幅の広がり』25件、『合同課程での学びと資格取得による自信』13件、『１年間で両方の資格を得た』７件があげられ、自分の人生に関わるものとして『困難に立ち向かう自信』31件、『自分を知る機会／人間形成の場』20件、『自分自身の出産育児に役だった』11件、『良き友人／思いでを得た』13件があげられていた。

3. 母校への期待と要望

母校への要望は、表16に示す通りで、生涯教育（研究・公開講座など）176名、大学の編入制度129名、図書館の利用87名、大学院77名、理念教育の継続74名、研究の指導・協力、就職情報の提供42名であった。今後の天使の教育に期待することの自由記述については表17に示すとおりで、９カテゴリーに分類された。最も多かったのは教育理念に関するもので『キリスト教精神に基づく建学の精神・教育』40件、次いで『人間愛・心の教育の重視』27件、『伝統・校風を大切に』９件があげられていた。専門教育への要望としては『大学における基礎看護教育の充実・発展』24件、『助産婦教育の専門性の向上・継続』９件、『保健婦・助産婦合同課程についての意見・要望』７件、『国際的に活躍できる人材の育成』３件があげられていた。また、『生涯学習の教育機関として充実・発展』19件が記述されていた。

V. 考　　察

本調査の対象は、１回生（昭和40年度）から35回生（平成11年度）までの797名で、分析対象となったの367名は、全修了生の46.0%であった。

表16　母校への要望

要望の内容	人　数
大学への編入学制度	129
大学院コース	77
生涯教育(研修・公開講座等)	176
図書館の利用	87
研究の指導・協力	69
校舎施設の利用	15
就職情報の提供	42
理念教育の継続	74
その他	9

1. 専攻科修了生の動向

1）修了直後から現在までの就業状況

北海道内の居住者73.3%と多いのは、短大衛生看護学科[2]（以下短大）と同じ傾向にある。常勤者は60.2%で、全ての就業者を合わせた就業率は79.3%で、短大[3]の68.8%に比べ高かった。

修了直後の就業職種は、助産婦58.9%、保健婦29.4%であるが、現在の就業職種は、保健婦34.0%、助産婦21.0%と逆転していることが明らかになった。また、保健婦・助産婦両方の資格を活かして就業したことのある人は、全体の27.5%いるという実態が明らかになった。現在の保健婦の就業人数は、修了直後の人数を上回っているが、これは、就業年数10年以上の人が28%を占め保健婦の定着率が高いこと、助産婦・看護婦から転職している人の多いこととが関連していると考える。助産婦の就業数は、修了直後の３分の１に減少し、最初の勤務先を３年未満で退職している人が44.9%で、その理由として結婚、出産育児をあげている人が多く、３交代で勤務を継続することの難しさが伺える。また、他施設への関心、キャリアアップで退職している人が助産婦に多いことも特徴で、修了後、数年を助産婦で働き、転勤・転職している人の多いことがわかる。

最初の勤務先の就業年数は、１年以上３年未満または３年以上５年未満の割合が高く、64.0%が５年未満で退職している実態が明らかになった。聖路加看護大学の実態調査では保健婦の就業では、３～４年後までに54%が移動していたと報告[4]しているが、本学の保健婦の就業は５年未満が45.3%でほぼ同様の結果といえる。本学においては特に、助産婦の場合１年以上３年未満が35.2%を占め、１年未満の9.7%を合わせると2.2人に１人が３年未満で退職していることになる。修了から現在までの平均の勤務年数を見てみも、保健婦9.9年、助産婦6.7年、看護婦5.6年で、保健婦の就業年数が長かった。この背景には、本学の特徴として取得した資格を活用して、他分野へ転職したり、キャリアアップしている状況もあるが、結婚、出産育児が強く関連していると考えられる。無職者の85.5%が、今後、看護職で就職することを希望していることからも、就業意識は高いことがわかる。現在無職の理由が、出産育児や仕事と家事の両立が困難、条件にあう就職先がないと回答していることからも、一定期間、子育てや家事に専念

表17　母校に期待する内容

期待する内容	件数
キリスト教精神に基づく建学の精神・教育 ・キリスト教精神に基づいた人間理解の教育は，看護にとって重要なので続けて欲しい。 ・キリスト教精神「愛と真理に生きる」天使の教育理念は，人間形成，職業人としての根幹を作ると思うので，その理念教育を継承していってほしい。 ・天使の精神（教育理念）の継承を私大の持ち味として守ってほしい。	40件
人間愛・心の教育の重視 ・人間愛，人権尊重を基盤とした教育はいつまでも大切なものと思います。 ・自分を見つめ，相手を思いやる心を教える天使の教育の継承を期待します。 ・知識・技術も重要ですが，基本となるのは人間教育です。	27件
大学における基礎看護教育の充実・発展 ・男女共学・自由な学校の雰囲気で教育の充実 ・看護実践力が乏しくならないような教育の実践 ・看護レベルの低下を感じます。看護の基本に戻り，学生の教育に力を入れてほしい。	24件
生涯学習の教育機関としての役割 ・大学への編入制度，生涯教育，図書館の利用，研究の指導・協力 ・短大時代の卒業，修了者が編入し学べる制度を設けていただきたい。また，大学院コースを設けて頂き，児童心理，臨床心理などの研究もできるよう要望します。 ・生涯教育や大学の聴講ができるような充実した，開かれた大学を期待します。	19件
伝統・校風を大切に ・少人数で密な教育が天使のよさのように思う。そのよさが継続されてほしい。 ・日常生活・考え方など昔からの天使らしさを大切にしてほしいと切に願っている。 ・歴史的にも長い教育の経験の中で培ったものをこれからも伝えていってほしい。	9件
助産婦教育の専門性の向上・継続 ・助産婦教育を大学レベルで行って欲しい。 ・助産婦養成課程の継続を，4年間の学校カリキュラムとは別にして頂きたい。	9件
保健婦助産婦合同教育についての意見・要望 ・高齢化少子化社会であるため，保健婦助産婦の両方の分野を学ぶことは重要なので，合同教育を続けていってほしい。 ・青年海外協力隊助産婦隊員として派遣される事となりました。途上国では地域の社会問題など，公衆衛生の考えが必要となるので天使での学びは貴重な体験となりました。	7件
国際的に活躍できる人材の育成 ・国際的にも活躍できる人材の育成 ・海外に向けて発信できるような看護学部になってほしい。	3件
その他 ・就職情報，母校の情報を提供してほしい。 ・地域の母子保健行政を充実させ，未来を担う子供たちを健全に育成するためにも，天使の卒業生がもっと保健婦で就職してほしい。 ・関係職種の人と連携できる人材の育成を。	15件

している人も多いが、仕事との両立が可能な勤務形態や子育て終了後の再就職の機会の増大が望まれる。特に女性としての出産育児の経験を活かして専門的実践能力を高めていくためにも職業の継続は重要な要因となるであろう。

現在の勤務先では、市町村・保健センターで勤務している人が最も多かったが、これは保健婦のみではなく、助産婦として勤務している人も含まれている。保健婦では、事業所、健診センター、訪問ステーションなどにも勤務しており、修了直後の保健婦での就職は市町村が多いが、キャリアを積んで就職の場を広げている傾向が認められた。助産婦は、総合病院の勤務者が多いが、保健センターや助産所、母子保健指導員として地域で活動している人もいた。本学専攻科の修了生の特性である「地域母子保健」に強い助産婦として活動していると思われるが、今後一層、助産婦として地域での活動が期待される。

職位では、係長職以上の管理職にある人が保健婦では、13.6%、助産婦では9%、看護婦では

20.5%であり、教育分野でも教授・助教授が32.1%で、職場においてリーダー的役割を担っていた。これらは、勤務年数と関係していると思われる。

2）修了後の教育と社会的活動

修了後に受けた教育では、大学の編入、通信教育、放送大学など大学卒業の学歴を得ている人が多く、さらに修士課程、博士課程と学んでいる人もいた。教員養成コース、国立公衆衛生院なども含め、多くの人が修了後も学び続けている姿が伺えた。また、今後受けたい教育や母校への要望でも大学の編入学や聴講、大学院などが多く、研修や公開講座等の要望もあり、生涯教育への関心が高いことが明らかになった。社会活動では、専門職業人として看護専門職の役員やボランティア、私的団体の役員、青年海外協力隊など広い分野に亘って社会に貢献している人が多かった。専門職業人としての看護の資質を向上させ、社会的評価を得るためにも、今後、ますますの自己研鑽や社会的貢献が重要になる。

2. カリキュラムに対する評価

カリキュラムの内容に関する評価では、94.6%の修了生が職業生活に活かされていると回答しており、特に「専門知識・技能が身についた」と評価していた。また、日常生活でも「自分の価値観を形成できた」「良い友人を得ることができた」「人間理解の幅が広がった」「広い視野で考えられるようになった」と評価している修了生が多かったが、本学の教育理念の浸透を示唆している。本学は、“愛と真理に生きる”という建学の精神に基づき、人間の尊厳と奉仕の精神を基盤とした人間形成および職業教育を提供してきた。専攻科においても自己を見つめ、他者を思いやることのできる職業人としての態度は、講義、実習のみでなく、修養会、合唱コンクール、クリスマスの集いなどの学校行事を通しても一貫して強調される教育理念である。

専攻科での学びの内容の意見としては、保健婦助産婦に共通するもので、母子保健の深まり、ライフサイクルを通しての対象理解、予防的視点や個人・家族から地域への広がりの視点、面接・保健指導技術などから対象理解の広がりや深まりを学び、また、保健婦と助産婦の役割の共通性と相違をとらえていた。これらの学びは、どちらの職種に就いても活かせるものであり、専攻科カリキュラムのコアとなる教育内容として位置づけられるものである。各々の専門性の学びでは、助産婦の知識・技術の学びが多くあげられていた、その一方、教育内容の不足では保健婦の知識・技術が多い傾向にあった。保健婦教育課程は、カリキュラム時間数が少ないことから、学習の範囲や内容が狭められ、各論レベルの学習時間が1年コースのカリキュラムに比べて少ないことや実習時間も助産実習に比較すると短いことの影響もある。また、学びの一つとして『看護者としての責務と看護観の形成』があげられているが、これは専門職業人として働いていく上での基盤となるものであり、キリスト教的人間観や命の大切さ、自己の価値観の形成など本学の理念教育にかかわる重要な学びである。

調査対象者の82.3%が、専攻科志望の理由を保健婦と助産婦の2つの資格が得られることおよび保健婦と助産婦の両方の教育課程を学習できることと答えていた。本学専攻科に入学してくる学生は、保健婦または助産婦のいずれかの専門性を志向するのではなく、両者の専門性に対する学習ニーズを持った学生である。すなわち保健婦と助産婦の両方の学習課題に取り組む意欲をもって入学している学生たちである。しかし、合同教育課程であるために、1年間の授業時間数は約1300から1400時間で、毎日講義・演習が4講目まで組まれ、夏休み・冬休み期間も短い学生生活を送り、さらに、カリキュラムの進行に伴い常に学習課題は輻輳している状況である。入学当初にはある程度の予測をもって臨んでいると思われるが、これらの現実は学生たちにとって心身ともに強さを要求されるものである。専攻科の学びで、不足として記述されている内容は、このような状況を反映している意見である。教育的側面から考えると、学生の能力に対応した学習プログラムと学習進行、ゆとりのある教育が望まれるところであるが、保健婦助産婦の合同教育課程であるが故のカリキュラム運用の限界もある。

しかし、このような一年間の学習をとおして得たものが、修了生にとって意味ある体験として認知されていることが明らかになった。保健婦助産婦合同課程で学んだことは、幅広い知識と視野の広がりから多面的に考える力、対象理解、看護の継続やケアそのものの広がりをもつことにつながっていた。また、両課程の学習には共通部分があり、

また仕事をしていく中で相互に知識を活かすことができる合同課程の利点についても実感されていた。職業選択の広がりもあげられているが、資格の活用で述べたように両方の職種に就いている人も多く、勤務先も多様で、専攻科の学びを活かして幅広く活躍していることがわかった。さらに、過密なカリキュラムを乗り越えた達成感や何事にも挑戦する前向きな姿勢など困難に立ち向かう自信を得ていることも明らかになった。また、よき友人や思い出を得、専攻科の１年間は、職業人としての基盤をつくることはもとより、人間としての幅や生き方にも影響を及ぼすものであると考える。

3. 母校へ期待すること

母校へ期待する内容では、本学の教育理念である「キリスト教に基づく建学の精神の継承」がもっとも多く、次いで「人間愛・心の教育」であった。この教育理念は、天使短期大学創立以来、大学として重視していることであるが、修了生にとっても支持されている教育体験であったことを意味している。

専攻科は定員20名の少人数教育を実施してきたが、大学になり学生定員が増えることによって、これまでの教育の質を確保できるのか危惧する声が、「大学における基礎看護教育の充実・発展」「伝統・校風を大切に」の内容の中に含まれていた。

また、「生涯学習の教育機関として開かれた大学の存在」としての側面も強く、大学の入学・編入学、生涯教育（研修・公開講座）を求めている修了生が多かった。看護職が社会の要請に応え、看護を魅力あるものとして生涯続けていくためには生涯教育を推進することが重要である。天使大学においても、修了生が求めている編入制度、聴講制度、科目履修生の受け入れや図書館などの施設の利用はすでに活用できる状況にある。しかし、修了生の要望をみると利用できる諸サービスの情報が十分に周知されていないことが考えられる。また、就職情報の提供の要望もあり、就職情報の管理をシステム化して、卒業生への情報の提供ができると同時に、卒業生からも求人情報の提供をしてもらえるような体制が望まれる。今後、積極的に情報伝達し、専門職業人として更なる成長の場として大学を活用できるようにする必要がある。

Ⅵ. 結　　論

専攻科修了生の367名の調査結果から、以下のことが明らかになった。

1. 平成13年3月現在の就業率は79％で、就業者の76％が常勤者である。
2. 就業職種は保健婦132名（36.0％）、助産婦77名（21.0％）、看護婦39名（10.6％）、教員28名（7.6％）で、勤務場所では、市町村・保健センター、総合病院が多かった。
3. 修了直後の就業職種は助産婦216名（58.9％）、保健婦108名（29.4％）で、最初の勤務先の就業年数は１～５年（56％）であった。退職理由は、結婚、出産育児、他施設・他分野への関心などであった。
4. 修了後に受けた教育は、大学が66名、大学院修士20名で、社会活動では、看護専門職団体の役員・委員、ボランティアなどが多かった。
5. 専攻科選択の理由は、保健婦・助産婦の両課程の学習・資格の取得が多く、専攻科の学びは職業生活では94.6％が、日常生活では73.6％、社会的な活動では46.9％が活かされていると回答していた。学びの内容は専門的知識・技術、視野の広がり、自己の価値観の形成、人間理解の広がりなどであった。
6. 今後受けたい教育、母校への要望では、大学編入、大学院が多く、研修・公開講座、図書館の利用や研究の指導・協力など生涯教育の場を母校に求めていた。また、理念教育の継続や就職情報の提供などもあがっていた。

Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

今回の調査は、同窓会名簿で住所記載のある者を対象に行ったために、専攻科全修了生の半数弱の分析結果であり、実態調査として限界がある。また35年間の修了生を合わせて分析しているが、カリキュラムの変更や時代によって修了生の評価が異なることも予想され、今後カリキュラムの改正時期との関連で分析し、評価することも必要である。

おわりに

本研究を行うにあたり、アンケート調査にご協力頂きました、天使女子短期大学専攻科修了生の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

1）菅原邦子他：天使女子短期大学卒業生の動向　天使女子短期大学紀要　73-91　1998
2）前掲1）
3）前掲1）
4）菱沼典子　小山真理子他：聖路加看護大学卒業より6－10年後の就業状況聖路加看護大学紀要　57-63　1994.

参考文献

1）近藤優子、飯田澄美子：自治体で保健婦業務に従事している聖路加看護大学卒業生調査　聖路加看護大学紀要　49-56　1994.
2）小川美重子　岡田実　他：本学部卒業生の保健婦就業者の累積数（1988）
千葉大学看護学部紀要　33-37　1989.
3）井出成美他：保健婦就業中の卒業生の公衆衛生看護教育への要望と活動現況
千葉大学看護学部紀要　123-128　1994.
4）鈴木正幸編：看護のための教育学「知る」から「わかる」への教育　メヂカルフレンド社　1993.

参考資料

専攻科衛生看護学専攻教育課程

教　育　目　的

本学の教育理念であるキリスト教的人間観を基調として、社会における看護の役割を認識し、既修の看護学を土台として、公衆衛生看護学、助産学の領域を深め、看護を総合的に理解し実践できる基礎的能力を養う。

教　育　目　標

1. 人間の宗教性を認め、人間の自由と尊厳を大切にする姿勢がもてる。
2. 地域で生活する個人、家族並びに地域全体および特定集団の健康状況、健康障害について把握し、その状況をひき出す要因について理解できる。
3. 個人、家族に対し健康の各段階に応じて、健康の保持増進、疾病の予防及び疾病の回復に向けて看護過程を展開し、さらに、妊娠、分娩、産褥各期及び新生児期にある対象に対しては健康診査及び助産ができる。
4. 集団を対象とした保健医療活動の中で、企画、立案、実施、評価の一連の過程を理解し、チームの中で看護の専門家として役割を果たすことができる。
5. 保健医療活動の中で、看護職および多職種の役割を理解し、チームワークをとることができる。
6. 専門職業人をめざして研究的態度をもち、主体的に行動し責任をもつことができる。

1965（昭和40）年から1970（昭和45）年までの教育課程

学科名	単位数	備考
公衆衛生及び予防医学	9	
厚生行政		公衆衛生概論・母子衛生行政に関する法規組織及び機関を含む
社会統計		母子衛生関係の統計を含む
学校衛生		
産業衛生		環境衛生を含む
伝染性疾患予防		急性伝染性疾患・結核・癩・性病・寄生虫についての疫学的考察を含む
慢性疾患予防		
公衆衛生看護の原理及実際	3	
公衆衛生看護	5	
母性保健指導		
乳幼児保健指導		
学校保健指導		
産業保健指導		
伝染性疾患予防指導		
慢性疾患保健指導		
産科学	3	
新生児学	2	
助産の原理及び実際	2	
助産の原理及び実際		
助産法		
精神衛生		
社会学		
社会倫理		
社会心理	5	宗教を含む
衛生教育		
医療社会事業		
ケースワーク		
栄養学	1	
研究	1	
特別講義		
臨床実習	3	（26～36週）770時間
臨地実習	2	（9週）
計	36	

1971（昭和46）年から1989（平成元）年までの教育課程

授業科目	演習・実習を含む単位数 必修	演習・実習を含む単位数 選択	授業科目	演習・実習を含む単位数 必修	演習・実習を含む単位数 選択
公衆衛生看護論Ⅰ	4		母子保健医学	2	
公衆衛生看護論Ⅱ		※6	助産論Ⅰ	4	
地域母子保健	3		助産論Ⅱ	3	
保健医療の社会科学		※2	助産業務管理	2	
家族社会学	1		母子保健管理Ⅰ	4	
保健統計		※2	母子保健管理Ⅱ	3	
疫学		※2	精神衛生		1
保健管理論	3		社会倫理		1
社会福祉社会保障制度論		※1	宗教哲学		1
公衆衛生行政		※1			
母子保健概論	1		合計	30	17

注：保健婦国家試験受験者は※印の科目、単位を取得すること。

実習時間内訳（保健所・市町村実習　9週間
臨床実習　14週間（天使病院13週　政令保健所1週））

1990（平成２）年から1995（平成７）年までの教育課程

専門教育科目

授業科目	単位数			卒業単位数	総時間
	必修	必修選択	自由選択		
看護人間学	1				30
助産学概論	1				15
生殖の形態・機能	2				45
母性の心理・社会学	2				45
乳幼児の成長発達	1				15
助産診断学	4				105
助産技術学Ⅰ	2				60
助産技術学Ⅱ	1				45
地域母子保健	1				15
助産業務管理	1				15
公衆衛生看護学概論		*2			45
地区活動論		*3			75
家族相談援助論	3				90
健康教育論	1				30
保健指導総論	1				30
保健指導各論Ⅰ	1				30
保健指導各論Ⅱ		*2			90
疫学		*2			60
健康管理論		*2			60
保健福祉行政論		*2			60
助産学実習					360
助産学実習Ⅰ	3				135
助産学実習Ⅱ	2				90
助産学実習Ⅲ	1				45
助産学実習Ⅳ	2				90
公衆衛生看護学実習					135
公衆衛生看護学実習Ⅰ		*1			45
公衆衛生看護学実習Ⅱ		*1			45
公衆衛生看護学実習Ⅲ		*1			45
合計	30	16		30	1,455
	46				

注：保健婦国家試験の受験希望者は、＊印の科目単位をすべて修得すること。

実習時間内訳　（助産学実習　8週間／公衆衛生看護学実習　4週間）

1997（平成９）年から現在までの教育課程

専門教育科目

	授業科目	単位数 必修	単位数 必修選択	一単位当たりの時間数	履修方法及び修了要件	総時間数
共通科目	生命倫理	1		30	必修8単位	30
	家族看護学	3		30		90
	母性父性の心理・社会学	1		30		30
	保健医療福祉システム	1		30		30
	看護管理	1		30		30
	看護研究	1		30		30
助産婦専門科目	基礎助産学Ⅰ		1	15	必修選択23単位	15
	基礎助産学Ⅱ		2	30		60
	助産診断・技術学Ⅰ		2	30		60
	助産診断・技術学Ⅱ		2	30		60
	助産診断・技術学Ⅲ		2	30		60
	助産学実習Ⅰ		1	45		45
	助産学実習Ⅱ		4	45		180
	助産学実習Ⅲ		2	45		90
	助産学実習Ⅳ		1	45		45
保健婦専門科目	地域看護学概論		1	30		30
	地域看護活動論Ⅰ		2	30		60
	地域看護活動論Ⅱ		2	30		60
	地域看護活動論Ⅲ		1	45		45
	疫学		2	30		60
	保健統計		1	15		15
	保健統計演習		1	30		30
	地域看護学実習Ⅰ		1	45		45
	地域看護学実習Ⅱ		1	45		45
	地域看護学実習Ⅲ		1	45		45
計					31	1,290

注１：保健婦国家試験受験資格を取得しようとする者は、共通科目の単位と保健婦専門科目のすべての単位を履修しなければならない。

注２：助産婦国家試験受験資格を取得しようとする者は、共通科目の単位と助産婦専門科目のすべての単位及び地域看護活動論Ⅱ、地域看護活動論Ⅲの単位を履修しなければならない。

実習時間内訳　（助産学実習　８週間／地域看護学実習　３週間）